

2024 年 03 月 05 日（火）【外為 L a b】松田哲

タイトル：【購買力平価説とアノマリー】

為替レート決定要因に、「購買力平価説」があります。

「購買力平価説」は、歴史的に有名ですし、それが実際の相場に役に立たなかったこともまた有名です。

「購買力平価説」とは、為替レートは自国通貨と外国通貨の購買力の比率によって決定される、という説。

1921 年にスウェーデンの経済学者グスタフ・カッセルが提唱した。

+++++

購買力平価から大きく乖離した状態が、長期的に続くことは難しいと考える人もいます。

確かに、5 年後や、10 年後の、二国間の経済を考えると、その可能性は、否定しません。

しかし、5 年後や、10 年後の長期であっても、購買力平価に近づく保証は何もありません。

「ならないかも知れない」可能性もあるのです。

また、5 年後や、10 年後といった長期の為替レートを考察することと、「短期」の、外国為替市場で外国為替レートの変動をとらえることは、意義が違うことと、私は思っています。

この場合の短期は、数日程度から、数ヶ月程度を指して、「短期」と言っています。

「マクドナルド・ハンバーガー」を用いて、購買力平価による為替レートの説明をした話も有名ですが、単なるエピソードに過ぎないので、これは、説明を割愛します。

（この程度は、有名ですから、興味の有る方は、自分で調べてください）

「購買力平価説」や、「実効為替レート」に関しては、それを知っていた方が、良いと思います。

知らないよりも、知っていた方が、絶対に、良いことです。

しかし、「相場に勝つためには、知らなくとも良いこと」です。

しかしながら、「知識は、無いよりも、あった方が良いこと」も、また、真実だと思っています。

+++++

「実効為替レート」「名目実効為替レート」「実質実効為替レート」上記に関しては、前回の
コラムで取り上げたので、そちらを読んでいただければ、と思います。

+++++

+++++

今回は、「アノマリー」についても触れておきます。

さて、では「アノマリー」とは何でしょうか？

株式市場などの金融マーケットで、「はっきりとした理論的、合理的な説明は出来ないが、
よく当たる」とされる経験則のことを「アノマリー」と言います。

日本の株式市場では、4月に株価が上昇しやすいという「4月効果」、アメリカの株式市場
では、10月に安値を付けやすく、10月に株を買うと儲けやすいという「10月効果」、など
が有名なアノマリーでしょう。

マーケット（市場）は、常に、経済合理性に基づいて動いている訳ではないということかも知れません。

+++++

株式相場（米国株式・日本株式）と外国為替相場に関するアノマリーについて、述べておき
ましょう。

株式相場（米国株式・日本株式）と外国為替相場は、直接的な関連はないと考えています。

株式相場と外国為替相場が関係無いといっているものではありません。

例えば、日本の大手機関投資家が、大量に米国株式を購入する場合には、ドルを買って、そ

のドル資金で米国株式を買います。

ですから、「米国株式相場が堅調なときに、ドルが買われる」もしくは、「ドル/円相場が堅調なときに、米国株式相場が上昇する」といったことがアノマリーと言って良いのでしょうか。

では、必ず、「米国株式相場が堅調なときに、ドルが買われるのか？」

もしくは、必ず、「ドル/円相場が堅調なときに、米国株式相場が上昇するのか？」

といわれると、そうとは限りません。

++++
++++

(2024 年 03 月 05 日東京時間 13 : 35 記述)